

上演 5

2024年7月31日 5校目  
中部日本ブロック

高田高等学校

「色々々々々々々」

第48回全国高等学校総合文化祭  
第70回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会 担当委員

大阪府立交野高等学校

水田莉陽

幕が上がると虹をモチーフにした旗が7枚並び、カラフルに飾り付けられた学校の机が積まれた教室。ピンクの制服を着たモモは室長であり、クラス劇の主役も担っている。その練習の中で配慮の無い言動を繰り返していたモモだったが、リハーサル当日に衣装の問題を巡ってクラスメイトに見放されてしまい、皆教室を出ていってしまう。ついにはずっと寄り添ってくれていたユウにすら見放されてしまう。

タイトルにある通り劇中では何度も「色々」という言葉が出てきた。目に見える色々、目に見えない色々、その使われ方は様々で、その言葉の便利さに気付かされた。また、話が進んでいくにつれてモモ以外の生徒たちにも複雑な背景があることが明らかになってくる。衣装係のカリンは、リハーサル当日に衣装が完成していなかったことでモモに責められたり、カリンには母がフィリピン人で稼ぎが少なく、学費を払うためにバイトをしているという背景がありながら遅くまで頑張って衣装を作っていた。クラスメイトのマキの妹、ミキはマキとそっくりの容姿で同じような言動をしていたがそれは姉が変な子であることに合わせたものであるなど、それらも全て「色々」という言葉で表すことが出来てしまい、言葉の持つ便利さだけでなく怖さも感じた。

今、社会では多様性という言葉が飛び交っている。だが討論では、何事もそれで片付けられており反論ができないという意見も出た。一見便利な言葉だが、この言葉を使うことの難しさを実感させられた。

また、講評委員の中で話題に上がったのはラストシーンだ。クラスメイトたちが各々のモチーフカラーの旗を被せてモモの姿を隠してしまう。この劇中でモモは何度も「見えなくなったら意味が無い」と発していたが、最終的にはモモ自身が無いものとして誰からも見て貰えなくなってしまい皮肉を思わせる表現のように感じた。モモを見ないふりをして自分達だけで完結させているような表現が、多様性と言いつつも変なものを排除し、いいものを作ろうという現代の風潮を表しているようにも思えた。

登場人物の様々な「色々」を通して、現代社会で便利に多用されている「多様性」に疑問を投げかける劇であった。

